

期値の選び方には鈍感で、必ず求める値に収束しますが、収束が遅いという欠点があります。収束するまでの繰り返し数が時には1万数千回に及ぶことがあります。こうなると大型計算機に頼らざるを得なくなります。マイクロコンピュータをつかっても計算できない事はありませんがコンパイラ型の言語を使っても数時間もかかってしまうため実用になりません。

現在はマイクロコンピュータを大型計算機のインテリジェントターミナルとして使用しています。時間のかかる逐次計算だけを大型で計算し、他はすべてマイクロコンピュータ側で処理しています。こういった使い方をするうえで、センターレポート第4号に掲載されたインテリジェントターミナル用プログラムは非常に便利で、使い易いプログラムだと思います。このプログラムを作製され、プログラムのコピーを快諾して下さった工学部の金丸邦康先生にこの場を借りて感謝いたします。

教養部における情報処理教育について

教養部

寺 崎 康 博

今年度から装いも新たに教養部において情報処理教育を開始した。当教養部では10年以上も前から総合科目の一つとして情報科学の名のもとに情報に関する基礎的な講義を開設し、成果をあげてきた。今回担当講師の交代を機に、「コンピュータによる情報処理に関する様々な問題の考察」を中心テーマに置き、講義名も情報処理として始めることにした。内容をこのようにしたのはもちろん理由がなければいけない。まずその第一は高度情報社会と形容される社会環境である。そして、第二にはこの科目の専任スタッフを持たない教養部としては担当講師のカバーできる範囲が限定されるということがある。

まず、最初の理由については講義の開設主旨とも関連するので少し述べておくことにする。新聞、テレビ、雑誌、あるいは書籍を通じて高度情報社会に関する記事を見ない日はないほどの情報洪水である。実際、その背後では生産現場や金融機関、あるいは事務所でのコンピュータの高度な利用や、ネットワークの形成が我々の想像以上に進んでいる。また、地域社会にとってこのような中でどう対応したらよいのかを研究、あるいは実験を重ねている現状がある。そのための予算も様々な形で確保されている。さらに、ワープロ、パソコンが家庭にまで普及し始めている。どちらかという現実の方がリードしていて我々はやや振り回され気味といえよう。

このような環境の中で健全な判断力を持つためにはやはりコンピュータに関する基礎的な知識が必要になる。無知あるいは過度のブラックボックス化は、極端な蔑視か崇拜という危うい方向に行きがちになるからである。そこで一番効果的な方法は何かとなると、月並みながら実際にコンピュータを操作してみるという実習教育にたどり着く。しかし、我々の経験に照らしても、この講義のために調べた他大学の方法を見ても、いきなり実習では視野が狭くなりがちであるし、拒絶反応を示す者も出てくる。コンピュータはもはや研究室や計算機室の中だけで議論する時代ではないし、工学部の学生に限らず、他の全ての学部の学生にとってもかかわりを持つものになっている。そのため概論と実習という二本立てで出発することにした。

理由の第二に関しては、情報関連の専任教官を持たないため私が世話役をおおせつかった。しかし、経済統計を専門とする者にとって幅広い知識を要する概論教育は手に余るため、講義の企画段階から情報処理センターに全面的に応援をいただいた。幸い、センター長の講義も一回得ることができ、好評のうちに終わったようである。その根拠は選択制の科目で、しかも250名近くの多人数教育ながら出席、レポート、試験と厳しく対処したにもかかわらず、9割近くの者が最後まで熱心に講義を聞いていたからである。

さて、レポートを読んでみて気の付いたいくつかを参考のため記しておきたい。各学部でも情報処理教育が盛んに行われているが、情報交換のためにも機会を見て詳しい教育報告をするつもりであるので、とりあえず読んだ印象であることをお断りしたい。学生が興味を持って調べた話題は多岐にわたるが、グループ分けすると1) コンピュータの将来について、2) テクノポリス等の政策について、3) プライバシー等の社会問題について、4) 情報自体の意味について、5) プログラミングについて、6) ハードウェアについてとなる。もちろんこれは講義の内容を反映しているが、主として工学部の学生には大学での学問に対して大きな動機付けの役割を果たしているようであった。また、他の学部の学生にとってもコンピュータに関連する様々な問題の所在を知ることができ有意義であったようである。

先に実習を望む学生もいたが、大多数は概論により幅広く問題を見ることができたと記している。マスコミから流れる情報量の割には学生はこの問題に関して具体的にはほとんど知らず、講義によって初めて知った者が多かったように思われる。レポートを書く段になり再考して理解が進んだと報告するものもかなりいた。概論教育の必要性を裏付けた形になっている。また、後半の実習に期待している学生が多いことも付け加えておくことにしよう。

今回の講義は内容の検討は早い段階から始めたが、開設についての広報はいっさい行わなかった。学生は数多い授業科目一覧の中からこの科目を見だし、しかも時間帯の重なり合う他の科目と比較検討して履修したことになる。次年度からは履修希望者が増加する可能性は高い。教養部ではどの時間帯をとってもどこかの学部の必修科目があり、一コマの開設では全学部の学生に履修の機会を与えることができないのが現状である。しかし、専任スタッフを持たない

現在ではこれ以上の学生を受け入れることもまた難しい。実習教育は概論履修者の3分の2を予定しているが、これ以上の学生が殺到するとまた困ったことになる。最後に、情報処理センターの協力を感謝を申し上げ、また全学の関係者にご理解とご協力をお願いして締めくくりとしたい。

長崎・テレトピア構想に考える

熱帯医学研究所環境生理

小坂 光男

長崎大学の付属図書館および医学分館運営委員と情報処理センター運営委員を数年に亘って併任して、意外に感じている事は、従来の図書館情報システムと新たなコンピュータ情報処理システムの相互乗り入れに、多くの大学人が戸惑い、現代の高度情報化社会の急進展に追従できず悩んでいる姿である。大学のこんな体質を尻目に、つい先日新聞は長崎にもテレトピア構想が実現する運びとなった事を報じている。以下その一部を抜粋して紹介すると、郵政省が昭和58年に提唱したこの構想はテレコミュニケーション（電気通信）とユートピア（理想郷）を組み合わせたもので未来型のコミュニケーションモデル都市づくりを意味するとの事。高度情報化社会の基盤を構築するには地域高度情報通信システムが核となり昭和70年にはNTTによってこのシステムは完成されるという。長崎県は離島の数でも日本有数。長崎、大村、福江の三つの市、五島、壱岐、対馬の22町を対象に本土と離島を結ぶ情報システムの導入をこのテレトピア構想に乗せることが認められ、今度のモデル都市の指定を受け、10月28日に発足したことは喜ばしい。ところで、テレトピアが一体何を目指しているのか？ 第一は上述の対照地域の各学校にパソコンを導入し、コンピュータに強い人材育成のほか、コンピュータ活用で教育の充実を図る「地方教育情報システム」。第二は図書館に対する要望が多様化、専門化しているため、県中央の図書館にコンピュータを導入、図書館情報システムを確立し、対象地域の図書館サービスの向上を図る…とある。さて、長崎大学の情報システムの現状はどうか？ 現在は、図書館情報以外に大学の教官が専門知識を平易に一般市民に講ずる開放講座が盛んで、NHK教育講座に似て、長崎大学でも数年前から20以上の公開講座が開催され市民から好評を受けているのは事実である。さらに情報処理センターの先生や職員の皆さんの努力によって、全国7ブロックを拠点とする大型コンピュータの相互利用によって学術図書館情報の収集は随分と様変わりしてきている。

長崎大学が総合大学化の道を歩んだ過程での、各学部の生い立ちの違いや、本部、坂本、片